

横須賀上映

2024  
11/24  
(日)

ドキュメンタリー映画

「食の安全を守る人々」  
上映と原村政樹監督のトーク

102分

50分

第36回  
有料上映会



16ミリ試写室

未来の子どもたちのために

# 食の安全 を守る人々

農薬の大幅規制緩和、ゲノム編集食品の流通——  
わたしたちのカラダや食の未来は？  
メディアが伝えない食の裏側に迫るドキュメンタリー

監督・撮影・編集：原村 政樹

プロデューサー：山田 正彦 語り：杉本 彩 音楽：鈴木 光男 企画・制作：一般社団法人 心土不二 配給：きろくびと

2021年/日本/カラー/102分 kiroku-bito.com/shoku-anzen



2024年 **11月24日(日) 13:00** ~ (開場 12:00)

横須賀市 文化会館 大ホール 京急線横須賀中央駅下車 徒歩 10分

横須賀市深田台 50

☎046-823-2950

チケット料金 1,000円 (前売り 800円) 高校生以下無料

チケット料金の一部を市内の児童養護施設 (2か所) の支援に役立てます。 ※なお、内容は変更する場合があります。予めご了承ください。

チケット販売：横須賀市文化会館

☎046-823-2951

主催：16ミリ試写室 <https://y16miri.com>

信濃屋書店 (若松町)

☎046-822-0405

問合せ：☎090-2901-0862 (松澤)

井出新聞店 (衣笠栄町)

☎046-851-0235

アナザワフォト (追浜駅前)

☎046-865-9963

後援：(福)横須賀市社会福祉協議会

感染症予防対策にご協力ください。

体調の優れない方は参加を控えて下さい







『16ミリ試写室』は1977年に発足。「どこでも素敵な映画館」を合言葉に、県や市の視聴覚ライブラリー所有の16ミリフィルムや映写機を活用し、視聴覚教育活動を続ける女性のNPO団体です。横須賀市内の図書館やコミセンなどの社会教育施設、老人ホーム、障がい者施設、地域の集会所などで年間約70回の映画会を開催しています。さらに、「心に響くメッセージを廉価で届ける」を目的に、ドキュメンタリー映画を中心に有料上映会も開催しています。2013年春、地域交流支援活動奉仕団体として緑綬褒章を受章。



# アグリビジネスは日本に幸せをもたらすのか—— それとも日本は世界の潮流に逆行しているのか？ 日本で、海外で農と食の 持続可能な未来図を描く人たち

種子法廃止、種苗法の改定、ラウンドアップ規制緩和、そして表記無しのゲノム編集食品流通への動きと、TPPに端を発する急速なグローバル化により日本の農と食にこれまで以上の危機が押し寄せている。しかし、マスコミはこの現状を正面から報道することはほとんどなく、日本に暮らすわたしたちの危機感は薄いのが現状である。

この趨勢が続けば多国籍アグリビジネスによる支配の強まり、食料自給率の低下や命・健康に影響を与えることが懸念される中、弁護士で元農林水産大臣の山田正彦が、長年、農業をテーマに制作が続いている原村政樹監督との二人三脚で撮影を進め、日本国内だけでなく、アメリカでのモンサント裁判の原告や、子どものために国や企業と闘う女性、韓国の小学校で普及するオーガニック給食の現状など幅広く取材。果たして日本の食の幸せな未来図はどこに…。

## 2020年 日本映画復興奨励賞受賞、 キネマ旬報文化映画ベスト・テン第7位の 『タネは誰のもの』の元となった、 CFでも話題を呼んだドキュメンタリー！

2020年 第94回キネマ旬報文化映画ベスト・テン第7位に選出され、同年の第38回日本映画復興奨励賞を受賞した『タネは誰のもの』のベースとなり、クラウドファンディングでも1600人以上から支援が集まり話題を呼んだ本作。山田正彦プロデューサーと原村政樹監督のタッグに加えて女優で作家、ダンサーの杉本彩がナレーションを担当。前作と本作を通して、農と食のあるべき姿が見えてくる。

食の安全  
を守る人々

監督・撮影・編集：原村政樹 プロデューサー：山田正彦 語り：杉本彩 音楽：鈴木光男  
取材協力：印鎗智哉 映像技術：李恩求 / 青木克都 整音：丸山昇 ホスプロデスク：原田修  
制作デスク：遠藤菜美恵 企画・制作：一般社団法人 心土不二 予告編制作：大友頌平（一般社団法人 SEA）  
宣伝美術：鯉江光二 配給：きろくびと 2021年/日本/カラー/103分  
kiroku-bito.com/shoku-anzen

## 原村 政樹（はらむら まさき） ドキュメンタリー映画監督



1957年、千葉県生まれ。上智大学卒業後、フリーの助監督としていくつかの制作会社で映像制作に携わった後、1988年、桜映画社に入社。同年、アジアの熱帯雨林破壊問題をテーマにした短編映画「開発と環境」で監督デビュー。以後、記録映画やテレビドキュメンタリーを多数手掛ける。主な作品に『海女のリャンさん』（キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位、2004）、『いのち耕す人々』（2006、同第4位）、『里山っ子たち』（同第3位、2008）、『天に栄える村』（同第5位、2012）、ETV特集「原発事故に立ち向かうコメ農家」（農業ジャーナリスト賞）など。2015年、『無音の叫び声』制作を機に、フリーの監督として独立。初の著書「無音の叫び声農民詩人・木村迪夫は語る」（農文協、2015）とあわせて農業ジャーナリスト賞をW受賞。以後は自ら撮影も務め『武蔵野』（2017）、『お百姓さんになりたい』（2019）、『タネは誰のもの』（2020）と精力的に制作活動を行う。2021年「食の安全を守る人々」、2022年「若者は山里をめざす」（農業ジャーナリスト賞受賞）、2024年「山里は持続可能な世界だった」、他。

